

## 第21回 kozoomサロン テーマ「転勤 転職 転居」について

清水健二

日本では新年度といえは4月から始まる所が多い。国の制度に合わせて、大手の企業や民間も年度初めに人事移動が行われ、転勤、転職、転居が春に動き始める。

私は学校を出て、大手機械メーカーに入社し定年まで務めたので、幸い会社を変わるという転職はなかった。親の代からの家を継いだので転居もしなかった。文系と違い理系で機械工学部出身だったので、設計部を皮切りに技術部門に長く所属したため転勤も比較的少ない方だった。しかし転勤に近い業務命令は多くて辛い思いをしたものである。今回は「転勤」をテーマにこの悩ましい人事について考えてみたい。

日本の高度経済成長を支えてきた企業は、終身雇用や年功序列と給与を保障する代わりに人事権を握り、企業の発展成長を建前に業務命令を発令してきたものである。大量の学生を採用し、頻繁に社内教育を行って没個性の金太郎飴的人材を育成してきた。毎年昇格試験を行って会社の方針に適応した人材を篩いにかけてながら選び、階層別教育を頻繁に行い、層を厚くすることで企業の業績を拡大して行った。積極的にジョブ・ローテーションによりキャリアを積ませるやり方で、どの企業も社員教育は有効な手段としてブームになった。その成果として「Japan as No1」と世界から評価されるほどに強力な集団が日本の経済を支えた。

業績の上がらない事業は、部門長の交代や人員の整理を行い、個人の都合などは殆ど聞き入れられない職場風土が構築され、従業員も厳しい業務命令に不満はあっても、会社はにんじんをぶら下げる処遇で、誰も忍の一字で耐えてきたものである。

企業の成長は「売上と利益」の右肩上がりの拡大路線が建前だったが、業務命令の一つとしての転勤は意外と本音が隠されているケースが結構あった。若い時は命令を受ける側だが、偉くなって命令する側になると、組織改革を理由に頑張ってきた部下を送り出すことは上司として嫌なものであった。転勤命令と同時に、昇格と言う勲章を与え送り出しても、中には様々な私的事情があつて嬉しくない人や、送り出す方も能力のある人なら、その人を失う事の不満が残る場合も多々あった。

人事に関しては、現代社会に関係なく古代から人々の関心事であり、先だって大兄太田隆次さんが著述された「万葉時代のさらりーまん」の単行本を進呈いただき興味を持って拝読した。

「人事考課は恐怖の的」と記されていて、千年を超える昔も今日の社会と変わらない心情を、和歌を通じて表現されている事を紹介して頂いているが、組織の中で働く限り人事評価は存在するものだと、改めて歴史上の人物を私なりに思い起こす動機となった。

1400年も昔、遣隋使として小野妹子は聖徳太子の命を受けて、中国へ命がけの海外出張をして

いる。その後遣唐使として多くの要人が、先進技術や先端の唐文化を学び渡航しているものの、さぞ厳しい業務命令を受け辛かったらうと思う。しかし勇猛果敢な人物も多くいたことだろう。

山上憶良が文武天皇から遣唐使に選ばれたのは41歳の年だった。下級役人だったが帰国後、伯耆国守に任命され、立身出生を果たした憶良は喜こんだのも束の間で、やがて都に帰って在住できるはずが続いて筑前国守に左遷されている。

もっと怖い転勤の話は、学問の神様と言われる菅原道真が、10世紀の初頭右大臣として采配をふるっていたが、左大臣藤原時平や大納言源光などとの確執から、あらぬ疑惑を理由に醍醐天皇を介して太宰府へ左遷された。「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ」と都をおもう有名な和歌を詠んでいるが、道真の悔しい思いが憎しみや恨みとなって、命令を下した都の者たちが急死したり、雷に打たれたり、事故死するなどが続いた。人々は怨霊となった道真公の祟りだと御霊を鎮め、祭神として後世に引き継がれていった。今では天満宮で神様として全国に祀られているが、何処まで真実かどうかは判らないものの、不当な人事は祟りを残すという忠告なのだろう。

源頼朝は弟義経を讒言(ざんげん)によって亡き者にしようと追跡するなど、トップに立つ人の命令が不幸をもたらした事例など歴史上枚挙に暇がない。人間のドロドロしたところは現代社会も変わりがないようである。「人事考課、人事移動、業務命令、転勤・・・」等々は、役人であれ、会社の社員であれ、組織で働く者には付いて回るもので、受け止め方によってその人の人生は大きな影響を与えるものである。

日本が戦後の再建を重厚長大型の路線で突っ走った結果、公害社会を引き起こし水質汚濁や大気汚染の除去技術、更に国民生活の改善など、環境整備のインフラ事業に国家が動き出したのは1960年代で、私の務める会社もこの分野に進出することになった。新しい事業が始まる頃から私はこの事業に従事することになった。施主は各自治体で環境整備施設の建設が国の補助事業として始まり、プラントのエンジニア



建設現場にて 左側が私(1965年)

リングから建設工事の完成まで2~3年はかかるものだった。若い頃は日本各地で受注した物件の建設現場へ工事監督員として私は派遣させられた。

当然ながら単身赴任の生活で、施主の地盤で厳しい仕事に向かい、不慣れな土地での生活はストレスの毎日だった。反面その地に住む人々との出会いで、多くの事を学び私を育ててくれた。

大阪本社では名古屋から西日本を担当し、東京本社では中部から関東、東北、北海道を担当した。ほぼ同じ陣容で仕事をこなしていたが、受注量の差が出ると大阪から東京へ、反対に東京から大阪へ転勤があった。私的な事情があったりしても業務命令には否応なく従がわされた。先輩も後輩も転勤を恨んでいながらも、誰も拒否することもなく忠実に社命を受理し、むしろお互いに助け合うほどの一体感があった。

私は40歳代の頃、高齢の両親と中学生と高校生の娘たちがいて、不在がちな私に代わって家庭のことは妻に任せていただけに、今でも妻に対しその苦労を思うと頭が上がらない。

65歳で退社したが還暦前に東京転勤を命じられて5年間単身赴任した。すでに両親も旅立ち、娘たちも嫁ぎ妻と東京住まいをしようと思ったが、今度は妻が動きたくないという。地域活動で忙しくし、友達が多くいて離れたくないからというので、結局私は独りで家を出た。一人での社宅住まいは寂しいので、あえて寮生活を希望し、熟年の単身赴任者ばかりの住まいを選び、千葉の浦安から都内の会社に通った。結果これは大成功だったと思っている。若い頃と違って、仕事一辺倒の生活から精神的にも体力的にも安定していたことと、何より寮生活で親しくなった同じ会社でも全く違った職種の人達との交流が私の人生を豊かにしてくれたからである。

寮生活の仲間たちと、よく旅行をしたり山登りを楽しんだ。尾瀬沼の燧ヶ岳や磐梯山、何より夜を徹



富士山頂にて(1995・8・3)右端が私)

して登った富士山のご来光の眺めは忘れられない思い出となった。

また単独で休日は東京一円を片っぱしに巡って自然を楽しみ、歴史的建造物や美術館を観て回った。



井の頭自然公園内(彫刻園入り口)

趣味で続けていた彫刻の勉強に、しばしば井の頭自然文化園にある北村西望大家の彫刻園を訪ねた事など、仕事も然ることながら生き生きと活動していたように思っている。退社して大阪に帰ってからも寮で一緒だった人達と今でもよく会って、思い出を語りながら盃を傾けている。

職場での転勤は職種によっても事情は違うが、私の働いていた時代は没个性的でマスプロによる事業拡大が求められていたが、今日では個性を重視したユニークな商品開発が求められ、個人の特殊能力を活かせる仕事ぶりが評価されるようである。欧米なみに自分の専門技術を活かし、転勤も少なく家族と共に生活する人が多いようだ。職場でのローテーションや転勤の是非について、賛否を問うと丁度半数ずつで拮抗している。時代が変わって仕事に対するあり方は多様化してきているようである。

自分にとって納得いかない転勤命令でも、命令の出す人も人間、多分に恣意的になるのも当然だろう。公明正大など難しく、多少は寛容の気持ちで受け止める度量が必要と思っている。

私は自分の経験から、日常仕事に追われながら自ら新しいものへ挑戦したり、積極的に友人を作る

ことは難しいが、転職や転勤により新しい生活や友人ができることは素晴らしいことだと思っている。慣れた日常の生活が変わることに不安も煩わしさもあるが、私は悩んでみても解決しないものなら、ポジティブに捉えてみようという割合楽観的な性格もあって転勤は悪くないと思っている。

「人間万事塞翁が馬」で、人生は吉兆や禍福が予想できないものである。何事もやってみて始めて道は開けるものだと確信している。自分の人生も終わりに近づき、生きてきた道は決して楽ではなかったが、色々勉強する事があって楽しかったと、このテーマを綴りながら改めて認識している。

令和4年3月 記



建設現場にて 左側が私(1965年)



井の頭自然公園内(彫刻園入り口)



富士山頂にて(1995・8・3)右端が私)

